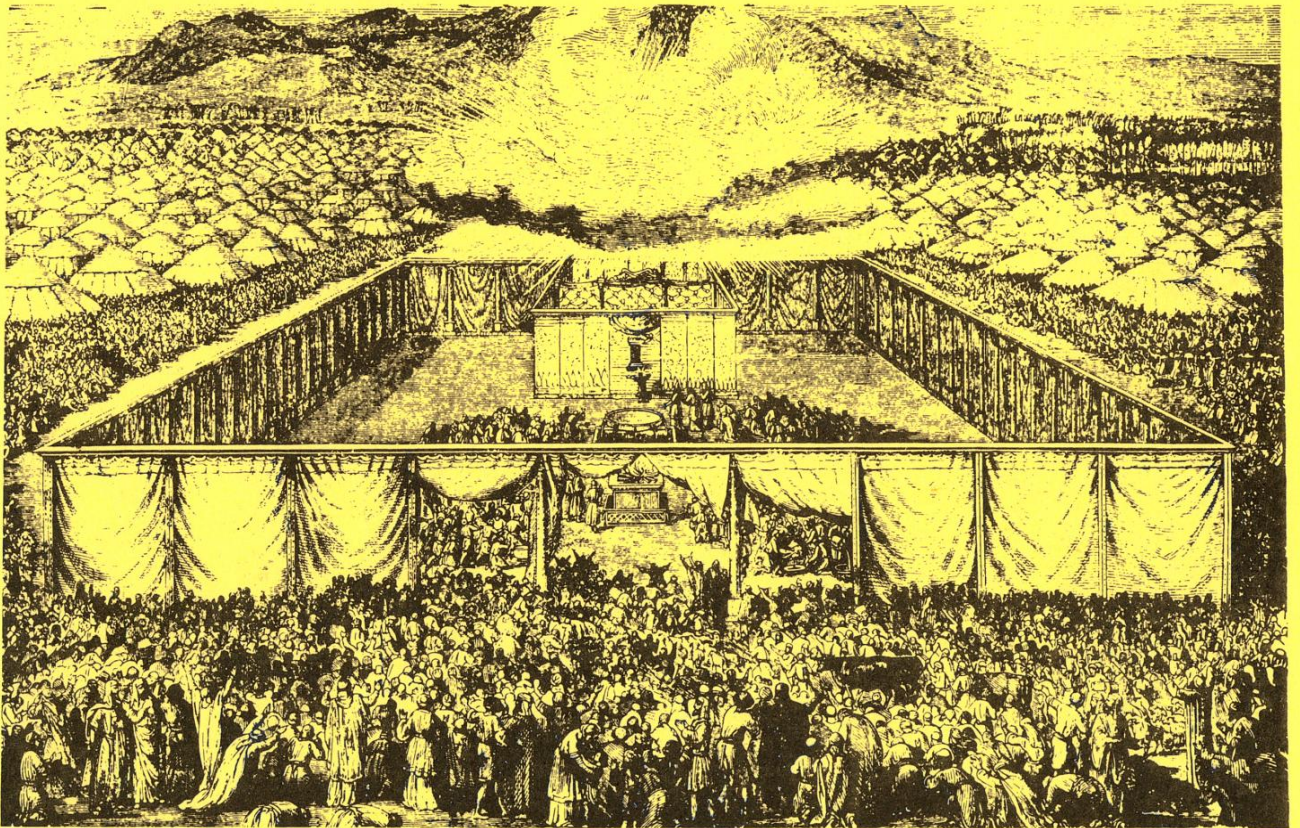




アンカー Anchor



『神よ、あなたの道は聖所にあり。』詩77:13 (英)

『われわれは今、大いなる贖罪の日に生存しているのである。』

大争闘下 224

この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし
不動にする錨(いかり)であり、かつ『幕の内』にはいり行かせる
ものである。

ヘブル 6:19

第5号

★ 目次 ★

アンカーの目的	1
略号の説明	2
キリストの性質	3
信仰から学ぶ教訓	11
真理の宝石	13
瞑想	16
証の書の誤訳・適訳	18
最も重要な働き—親業	19
時兆	21
経済大恐慌はくるか!	25
後の雨が今降っている?	26
広告	31
編集後記	32

◆アンカーの目的◆

アドベンチストの中に三つの大きな曲解がある。

1. 三天使の使命の曲解
2. ダニエル書 8 : 14 の聖所の清めについての曲解
3. 預言の霊についての曲解

我々は次の事を信じてアンカーを出版している。

1. 我々 SDA の働きと使命は三天使のメッセージである。(GT p.384, 2SM p.142)
第三天使の使命が再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。
(9T p.98, GC II p.140)
2. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の特別な贖いを受ける。
(EW p.414, 5, 7)
3. 我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な体験を拒み続けてきた。特に 1888 年以来。
(RH 8/26, 1890)
4. ダニエル書 8 : 14 — 聖所の解明に御業の完成はかかっている。
5. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。
6. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー (錨) は三重の天使の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証 (預言の霊) 等である。
(EW p.417, 1T p.300)
7. アンカーにはリレーの最終走者の意味がある。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代と信じる。不信仰によって、140 年も時は延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している (GC II p.182, Ed p.328)。信仰の義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨と御業の完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の今日の義務は何なのか、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたいと思う。

証の書略号の説明

略号

AA 患難から栄光へ
 AH アドベンチストホーム
 1～7 BC バイブルコメンタリー 1～7巻
 CD 食事と食物の勧告
 CG 家庭の教育
 CH 健康についての勧告
 Chs クリスマスの奉仕
 CM 文書伝道者
 COL キリストの実物教訓
 CSW 安息日学校の勧告
 CT 両親、教師、生徒への勧告
 DA 各時代の希望
 Ed 教育
 Ev 伝道
 EW 初代文集
 FE クリスマス教育の基礎
 GC 各時代の争闘
 GW 福音伝道者
 LS ホワイト夫人略伝
 MB 祝福の山

略号

MH ミニストリーオブヒーリング
 MM 医療奉仕
 MYP 青年への使命
 PK 国と指導者
 PP 人類のあけぼの
 SC キリストへの道
 SD 神の息子、娘たち
 1～4 SG 霊の賜物1～4巻
 SL 清められた生活
 1～3 SM セレクテッドメッセージ1～3巻
 SR 生き残る人々
 1～9 T 教会へのあかし1～9巻
 Te 節制
 TM 牧師と働き人への勧告
 RH レビューアンドヘラルド
 ST サインズオブザタイムズ
 MS 原稿
 Letters 手紙
 YI 青年のてびき
 HL 健康的な生き方

神はみ言葉の真理の中で、ご自身についての啓示を人間にお与えになった。そして、真理を受け入れるすべての者にとって、真理は、サタンの欺瞞から彼らを守るためである。今日、宗教界に広く行きわたっている害悪に戸を開いたものは、これらの真理の軽視である。神の律法の性質と重要性が、ほとんど見失われている。神の律法の性格、永続性、義務についての誤った観念が、改心と清めについての誤りを引き起こし、その結果教会内の敬虔さの標準を低下させるに至っている。ここに、今日のリバイバルにおいて神の霊と力が欠けている理由を見いだすのである。

大争闘下巻p 191、192

キリストの性質と人の性質

説明 何故我々はキリストの性質について学ぶ必要があるだろうか？これは神学的なものだから神学者にまかせておけば良い、平信徒には神学はチンプンカンプンだと思う人が多い。しかし、重大な真理であるなら研究する必要がある。我々の思想と生活にかかわるのだから。

「神の御子の人性は我々にとって全てである。それは我々の魂をキリストに結びつけ、キリストを通してさらに神に結び付ける黄金の鎖である。これが我々の研究課題とならなくてはならない。」

ユース・インストラクター 1898年10月13日

さらに肉体の筋肉の発達もそうであるように、知的、霊的にも困難と思える問題にぶつかって、研究努力する時に知力は発達するのである。日常の平凡事にばかり心を奪われ、他人の書いたもの、安易なものだけを読むならば、心はいじけ、知力は弱まる。教育 133

イエスは完全になれと教えている。しかし、命令だけでなく、その方法も教えている。完全への道は二つある。「わたしは道である。(方法 Way)」とイエスは言われた。キリストは神に何がおできになるかではなく、人はどんな者になり得るかを示すためにおいでになったのである。さらに「神よ、あなたの道(Way 方法)は聖所にあり」(詩篇77:13(英))とある。再臨信仰の土台はここにある。そういう意味で、ミラー氏のキリストの性質に関する記事を研究して頂きたいと願うものである。(編集者)

キリストの性質と人の性質

デビッド・ミラー

先回の「アンカー」で、いかにイエスが時を同じくして人と神の両方であり得たか、という質問を取り扱った。イエスは人として、全ての奇跡を行われた時のように、完全な品性を維持するためにも常に父なる神に頼っておられたということを学んだ。イエスは父の理解と容認がなければ、自分の力では何一つなさらなかった。この点において、彼は我々の完全な模範であられる。何故なら、彼は完全に人として行動されたからである。しかし、おそらく最も重要なことは、この問題は学者たちだけが取り扱うことのできる奥深い神学ではないということである。これは我々全ての者、特に地球歴史の最後の時代に生存する我々に関わる問題なのである。今回「論点」として扱われている問題は、あなたに何の関わりがあるかを再び示してくれるであろう。この記事で、イエス・キリストはどのくらい人のようであり、又、どのように人と異なっていたかについて取り扱いたいと思う。

肉の様に造られたひとりの人

「……すなわち、御子を、罪の肉の様に罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。」(ローマ8:3)

「御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ」(ローマ1:3)

「このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に、それらをそなえて

おられる。……」(ヘブル2:14)

「確かに彼は天使たちの性質をとられることはしないで、アブラハムの子孫の性質をとられた。」

(ヘブル2:16—英文)

「そこで、イエスは、……あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。」

(ヘブル2:17)

3つの見解

1. キリストは人であられ、全ての人がそうであったように、同じ肉をもった人間であられた。このことに関して、聖書は非常に明確である。彼は我々と同じような人であられたが、以前全ての人々が失敗した点において成功をおさめられた。全ての人々は罪を犯したが、イエスは犯されなかった。何故?どのようにして生まれたその日から、十字架上で死なれるまで、罪に打ち勝つことができたのだろう。いったいどのようにして?

2. 一方、もし我々が、彼には利点(advantage)があったのだと言うならば、彼の完全な生涯は我々にとって公正な模範とはならず、到達不可能な目標であると結論づけることになる。彼は我々をごまかし、御自分の完全な生涯を、何か我々が実際に模倣できないものとしていると、どうにかして結論づけるのである。

もし第二番目の見解をとるならば、我々は多くの名ばかりのクリスチャンたちが結論づけた考えをとることになる。それは、クリスチャンの生涯とは、罪を許されて神に受け入れられる生涯であるという考えである。けれども、それは罪に完全に勝利する生涯ではない。この完全な勝利は(どちらが先であれ)、再臨の時か死後、我々の体が変わえられる時にだけもたらされると彼らは結論づけるのである。

3. 第三番目の見解を紹介したいと思う。他の二つの見解は、ある程度現実性を持つてはいるが、どこかのがはずれていると私は信じる。

イエスはあらゆる点において全く我々と同じであったと言うならば、数学的確率の上では有り得ないことであるにも拘らず、どのようにして、彼は完全な生涯を生きること成功したと結論づけることができるのだろう。これは全く信じ難いことである。あらゆる点において、全く我々のようでありながら、それでもどのようにして残り全ての者が失敗した点で成功をおさめることができたのか。この見解には、何か見落とされている要素があるに違いない。

イエスは我々にはない利点を持って生まれてきたのか、それとも持たないで生まれてきたのか、我々は尋ねなければならない。見解1を支持する者たちはだいたい利点などはなかったと言う。見解2を支持する者たちは利点があったと言う。……私は利点があったと提言したい。一つのことを頭に入れている限り、これは不公平な利点ではなかったのだと言える。これは全ての者が手に入れることのできる利点であることを理解しなければならない。もし全ての者が手に入れることのできる利点であるならば、それは公平なことであり、イエスは、我々が模倣することのできない模範ではなくなるのである。

この利点とは簡単に言えば、イエスは生まれた時から聖霊で満たされていたということである。彼は御自身の内に神と調和する心を持っておられた。彼は誘惑され、それに屈服することもできたが、そうはなさらなかった。アダムは誘惑された時、それに屈服して失敗した。イエスは失敗なさらなかつた。

った。

矛盾しているように見えるもの

キリストと人の性質の研究は、容易なものではない。次にあげる E. G. ホワイトの二つの引用文を読むと、上の問題をよりやさしく理解することができる。過去においては、自分たちの見解を支持するために、次のこれら二つの引用文のどちらかが用いられてきた。そうすることによって二つの相反する見解ができあがったのである。しかし、これら二つを調和させることが必要である。このことがなされる時のみ、正しい理解を得ることができるのである。

靈感の書に一見矛盾しているように思われる引用文がある。初めちょっと見ると、それぞれ一方の見解だけを支持しているようでもある。1. キリストはあらゆる点において全ての人と同じであった。2. 彼は利点をそなえていた。つまり、1. キリストは全ての人と同じような罪の性質を持っていた。2. 彼の性質は完全なものであったということである。

「キリストの屈辱を考えなさい。彼は罪によって退化し、汚された墮落した人間の性質をとられた。」
(4 BC 1147)

「キリストの完全な罪のない性質に関して疑いを抱いてはならない。」(サインズ1898年6月9日)

神の靈感によって書かれたこれら二つの引用文のうちに、キリストの性質は罪と罪のない性質の両方であったことが認められる。これはあり得ないことなので、預言者が真に言わんとしていることを探らねばならない。これを少し分かりやすくしてくれる、もう一つの引用文を紹介する。

「人間としてのキリストの性質は、我々と同じようなものであった。そして、それによって起こる苦しみを彼はより鋭く感じとられた。何故なら、彼の靈的性質は、罪の痕跡が全くないものであったからである。」(5 BC 1104)

この引用文で、キリストは「靈的」性質を持っておられたことが分かる。この「靈的性質」が彼の内に又は性質の一部分としてあった。この「靈的性質」は、キリストの神性のことではない。理由は次にあげる引用文の中から読み取れる。

「キリストの人性はどれほど、神の不興から逃れたいと思ったことか。彼の魂はどれほど解放されることを望んだことか。」(ibid)

預言者は「キリストの人性」について述べているのである。その人性は兄弟たちと同じようなものであった。

人間は物質(肉体)的存在である。目があり、耳があり、体があり、血液を送り出す心臓があつて、脳がある。これらの全ては物質的なものである。この物質的構成の一部として、人は定まった能力を持ち合わせている。つまり、肉体的、知的、道徳的能力である。50キロのものを持ち上げられるか、それとも持ち上げられないか(肉体的)。学校の試験に合格できるか、それとも不合格になるか(知的)。

酒やたばこの誘惑に抵抗できるか、それとも負けてしまうか（道徳的）。これらの能力は遺伝によって、習慣によって、教育又はこれらの全ての要素によって決定される。イエスはその肉体を通して受け継がれてきた、即ち、アダムからアブラハムを経て受け継がれてきた、これらの弱められた能力、肉体（物理）的性質を持つておられたのである。

「確かに、彼は天使たちの性質をとられることはしないで、アブラハムの子孫の性質をとられた。」

（ヘブル2：16—英文訳）

「イエスがサタンと争うために荒野へは行って行かれた時には、アダムの時ではなかった。四千年間にわたって、人類は体力も知力も道徳的価値も低下していた。しかもキリストは退歩した人類の弱さを身につけられた。」（各時代の希望上 124）

イエスは人として、50キロのものを持ち上げることができたかも知れないし、できなかったかも知れない（肉体的）。試験に合格できたかも知れないし、できなかったかも知れない（知的）。肉体的存在としてのみ、神とつながり、御自身の神性の力を用いられずに、イエスは罪に抵抗できるか、それとも負けるかのどちらかであったのである（道徳的）。つまり、ただ人として、人性のうちに聖霊が内住していなければ、イエスは他の人間と同じように、罪に対しては全く無力であったのである。

これら三つの能力は全て肉体、肉を通して、即ち、アダムからアブラハムを経てイエスに受け継がれたのである。彼は人であられた。人として、御自身の力だけで罪に抵抗することは不可能であった。けれども、イエスは罪に勝利された。彼は生まれた時から聖霊で満たされていた。彼には上からの力が注がれていたのである。

先に挙げた能力（肉体的、知的、道徳的）は人の肉体（物質）的性質の面に含まれる。同様に人は霊的性質も持ち合わせている。先に引用したホワイト夫人の書では、「彼の霊的性質は、罪の痕跡が全くないものであった」とある。人は物質的（肉体的）性質と同じように、霊的性質を持ち合わせているのである。

しかし、イエスの霊的性質は、罪に全く傾いていないものであった。「彼の霊的性質は、罪の痕跡が全くないものであった」。「キリストの完全な罪のない性質に関して、疑いを抱いてはならない」。再びホワイト夫人は、キリストの性質に関して次のように述べている。「彼の内には悪の傾向が一瞬たりとも存在しなかった」（5 BC 1128）。「彼の霊的性質は、罪の痕跡が全くないものであった。」

先に挙げた、一見矛盾したような二つの引用文で述べられていることをまとめてみたいと思う。「キリストの屈辱を考えなさい。彼は罪によって退化し、汚された、墮落した人間の性質をとられた。」

（4 BC 1147）イエスは墮落（退化）した人間の性質を持つておられた。この墮落した性質とは、物質（肉体）的人性のことであった。

「キリストの完全な罪のない性質に関して、疑いを抱いてはならない」（サインズ1898年6月9日）。あらゆる罪から解放されていたのは、キリストの霊的人性のことであった。

聖書にもこのことがかなり明確に書かれている。キリストはどの点において人と同じであったのかが述べられている。

「御子は、肉によればダビデの子孫から生れ」（ローマ1：3）。

イエスはどの点においてダビデの子孫のようであったのかと聞かれれば、「肉において」と答えるこ

とができるのである。

墮落以前、それとも墮落後のアダムのようにであったのか？

これは今まで大いに議論されてきた問題である。相反する見解をとった様々な本が書かれてきた。ここで紹介するにはいささか難しい問題である。何故なら、これまでにあまりにも多くの反論が出されているからである。ほとんどの困難の原因は先入観にあると筆者は考えている。しかしながら、ここで提言されている事柄を新鮮な心で見つめ、何が真理なのかを自分で吟味し、自分と違う意見を批判したり、自分の意見だけを容認するということがないように、公平な目を持つ必要がある。

次の聖句では、キリストとアダムを比較してこのように述べている。

「このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいつてきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。……しかし、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひとりの罪過のために多くの人が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりの人、イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか。かつ、この賜物は、ひとりの犯した罪の結果とは異なっている。何故なら、裁きの場合は、ひとりの罪過から、罪に定めることになったが、恵みの場合には、多くの人の罪過から、義とする結果になるからである。」（ローマ5：12, 15, 16）

ホワイト夫人はキリストを第二のアダムとして述べている。

「キリストは第二のアダムと呼ばれている……」（ユース・インストラクター 1898年6月2日）。

この文は、当初の質問について何ら論争をかきたてるものではない。けれども、キリストはどちらのアダムのようにであったのだろうか。上の文を続けて読むと、明確な説明を見つけることができる。

キリストは第二のアダムと呼ばれている。彼は純潔さと清廉さのうちに神につながっており、神にこよなく愛されたからである。キリストは墮落後のアダムのようにであったのか、それとも墮落以前のアダムのようにであったのかという決断は、読者にまかせることにする。ホワイト夫人は、「彼は第一のアダムが始めた所から始められた」と述べている。第一のアダムはどこから始めたのであろうか。勿論、罪のない者として、墮落以前の純潔さと清廉さからである。

ホワイト夫人は他の箇所でも「第一のアダムの内には腐敗した原則や、悪への性癖や傾向が全くなかった」（手紙191 1899年）と述べ、さらにキリストについても「彼のうちには、悪の傾向が一瞬たりとも存在しなかった」（5 BC1128）と述べている。

両方のアダムには傾向がなかった

これら二つの引用文の中で、二人のアダムが比較されている。どちらでも「傾向」という言葉が使われており、第一のアダム、即ち本物のアダムにも、第二のアダムであるキリストにも傾向がなかったと書かれている。確かにキリストは、一つの重要な面で墮落以前のアダムのようにであった。キリストはその霊的人性において、墮落以前のアダムのようにであったと筆者は結論づける。

墮落以前のアダムのようではなかった

「罪が何世代にもわたって、人類の上に恐ろしい傷跡を刻んできた。そして、退化した肉体、知性、道徳性が人類家族に行き渡った……墮落以来、その大きさは縮まり、体力は弱まり、キリストが地上に来られる頃には、道徳的価値観の標準がだいぶ低くなってしまっていた。そして墮落した人間を引き上げるために、キリストはその人のところまで下らねばならなかった。キリストは弱く退化した人類と同じような品性をとられた」(R&H 1874年7月28日)。

上で述べられている「肉体、知性、道徳性」の退化とは、キリストの物質(肉体)的人性と関連している。何故なら、「彼の霊的性質は、罪の痕跡が全くないものであったからである」(5 BC 1104)。

注意深く考えよ

キリストがもし、地上で人としてお生まれになり、人として生きられ、そして、この地上に来られた時には他の人類に対して利点となる能力や力、その他いかなるものも持っておられなかったとすれば、お生まれになった日から、十字架上で死なれる日まで、その記録に一つの罪も残さないで生きることを可能にしたものは、一体何だったのであろうか。

キリストは罪を犯さないように定められていたのではなく、罪を犯す可能性があったというのが私の答えである。他の全ての者が失敗したところで成功をおさめる可能性は、数学的な確率においてはゼロに近いものであった。彼は何らかのかたちで他の人とは違っていなければならなかったはずである。

明らかに、キリストには利点があった。彼は性癖や、罪への傾向を持たないでお生まれになった。アダムのように罪を犯すこともできたが、そうならなかった。肉的性質においてキリストはアダムよりも不利な立場にあった。けれども、もしキリストが他の人間と同じようにこの世界に来られたとしたら、失敗したことだろう。彼は聖霊に満たされていた。彼は神の性質にあずかっており、父なる神の御像をそなえておられた。キリストはその状態を保つことを選ばれたが、アダムは反対の側を選んだ。第一のアダムは失敗したが、第二のアダムは成功をおさめたのである。(ローマ5:15~19参照)

イエスには利点があったのか？

イエスは人であられたと同時に神であられ、罪に勝利するために神性は用いられなかった。何故なら、それは彼に不公平な利点を与えることになるということ为先回の「アンカー」では書いたが、今回イエスには利点があったと述べるのは少し変かも知れない。

一見矛盾しているように見えるものは、容易に説明することができる。イエスは勝利するために神性を用いられなかった。何故なら、我々は神性を持っていないからである。神性を用いることは、不公平な利点を用いるということになったであろう。それでは我々が模倣することのできる模範とはなり得なかったのである。

それでも、イエスはお生まれになった時から、墮落以前のアダムのように父なる神との関係を保っておられた。これは不公平な利点とはならない。何故なら、この神との関係は、全ての者が持つことのできる関係だからである。我々は神と共に生きるということを学び、神に我々の生活(命)を支配(コントロール)して頂くことができる。祈りとみ言葉の研究によって、日々神との関係をより密接なものに

することができる。エノクのように、神と共に歩むということを我々も学ぶことができる。イエスは御降誕の時、我々にはないものを持っておられたが、それは我々が決して持つことのできないものではなかった。イエスにとって、我々と同じ所から出発なすることが必要であったのではない。我々がもし彼と同じように聖霊にあずかるならば、我々がもし彼と同じように神のご性質にあずかるならば、我々も成功をおさめることができるということを、イエスはただお示しになる必要があったのである。

イエスがもし限りない御霊の恵みをもってお生まれにならなかつたとすれば、全生涯の間完全であられることは不可能であったことだろう。完全な模範となるために、イエスは御霊をもって生まれ、全生涯中、御霊の内住を継続させねばならなかつた。サタンに勝利なするために、全ての試験に合格しなければならなかつた。神の性質に完全にあずかる者として、イエスはそれを成し遂げられたのである。彼は父なる神の力によって、人として勝利をおさめられたのである。我々もキリストの力によって、同じように勝利しなければならぬ。

あなたにとって何の関わりがあるのか？

もし人に肉体的人性だけで、霊的人性がなかつたとすれば、罪は肉体的性質の内にもみ存在することになる。それは、罪とは肉体の産物であり、肉体の内にもみ生じたものであるということになる。言い換えれば、我々は全く肉体的存在であるならば、肉体が変えられるまで、罪は人の生命から取り除かれることはないということである。「肉体が変えられるまで」、即ちキリストの再臨の時までである。

第二の見解として、この記事の前半に確認されている、墮落以前の状態に到達する時を再臨の時にもつてくると、従順が不可能になってしまう。イエスが持つておられたものを、我々が持つていないとすれば、彼は我々が模倣することのできる模範ではなくなってしまう。我々はただ罪を継続することになってしまう。これが今日の「クリスチャン」の大半がとっている立場である。イエスは我々の模範ではなく、救い主であると彼らは言う。彼らは福音を見る時に、許しの方法だけを取り上げ、この地上の生涯において完全に到達するということは、全く考えないのである。完全なクリスチャン品性には、この地上での生涯を終え、死後肉体が変えられる時にのみ到達できると彼らは信じるのである。

実際、このような見解は、今日、セブンスデー・アドベンチストの多数の学者や、教師、牧師たちによって掲げられている。この見解は、終わりの時代の教会にとって極めて重要な教理を否定している。これは、審きに対する備えや、審きの恵みを完全に台無しにしてしまう教えである。2300日の預言は、もはや教会内では意義深い教理ではなく、我々は世に対してもはや特異な教えは持たないことになる。品性完成は再臨前ではなく、再臨の時に起こるという見解は、イエスが雲に乗って現れる前に完全な民として描写されている、十四万四千の必要性をなくしてしまう。

完成に関するこのような見解は、現在の従順を不必要なものにしてしまう。何故なら、もしイエスが来られて我々の肉体が変えられる時まで、完全になれないとすれば、どうして従順であろうと試みるのか。更に重要なのは、もし我々がこのような考えに固執すれば、本来我々がなすべきことをしなくなるということである。

次に挙げるイラスト（例図）で、キリストと人を描写したいと思う。大きな四角形は肉体的性質を表わす。小さい四角形は霊的人性を表わす。この論題を描写するにあたって幾度もこの図に戻らぬと思う。これは単純ではあるが、極めて重要であることをきつと理解するであろう。

A. T. ジョーンズ
砂川満 訳

「信仰を強めることの必要性を我々に促している聖書の意味を知ることは、我々に要求される他のいかなる知識よりも重要なものである。」

注意していただきたい——聖書の言わんとしていることは「信仰を強める必要」ということであり、そのことを知ることが大事である。特に信仰を持つことではなく、信仰を強くすること——と述べている点である。

聖書には、信仰を持つことの必要性はあまり述べられていないが、我々が信仰を強くすることについては多くの箇所では述べられている。

その理由は、全ての人には始めから信仰が与えられており、彼らにただ必要なのは、その与えられた信仰を強くすることだからである。既に与えられている信仰を強くすることなしに、既に与えられている信仰以上の信仰を持つことはできない。又、信仰が強くされる時、これほど成長の早いものは知られていないのである——「あなたがたの信仰が大いに成長」（テサロニケ第二の手紙 1：3）するのである。

信仰とは、み言葉が言われることをそのまま成し遂げて下さると期待し、言われることを成し遂げて下さるその「み言葉だけ」により頼むことである。言われることをそれ自身で行われる神の言葉、「み言葉だけ」により頼むことを強めていくことは、即ち信仰を強くすることなのである。

信仰は「神の賜物である」（エペソ 2：8）。そして、それは全ての者に与えられているということが、聖書では明確に述べられている。「神が各自に分け与えられた信仰の量り」（ローマ 12：3）。この「神が各自に分け与えられた信仰の量り」とは、神が生まれてくる全ての人に与えられる資本であり、人はその資本をもって人生を始めるように定められているのである。そして、全ての人には自己の魂の救いのために、この資本を大いに活用することが期待されているのである。

この資本が使われる時、減ってしまう危険は全くない。使われれば使われるほど、確実にそれは増していき、「大いに成長」するのである。そして、成長すればするほど、確実に主の義と平和と喜びが、魂の完全な救いに至るまで保証されるのである。

もう一度言うが、信仰は神の言葉によって起こる。このように書かれている。「『言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある。』この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である」（ローマ 10：8）。従って信仰、又は信仰の言葉そのものが、全ての人々の口にあり、心にあるのである。

どうしてこうなったのか？——いきさつはこうである。人類最初の夫婦が園で罪を犯した時、彼らはサタンを完全に信じてしまった。彼らは自分たちを全くサタンに明け渡してしまった。彼らは完全にサタンによって捕らわれの身になってしまったのである。その時、人とサタンとの間に固い協定と和平条約が結ばれた。けれども、神はそのまま放っておかれなかった。この協定を無効にし、和平を損なわれたのである。そして、神は自らのみ言葉によってサタンに次のように言われた。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に」（創世記 3：15）。

「神だけが女のすえとへびのすえとの間に、継続的に恨みをおくことができになる。罪を犯して以

来、人の性質は悪となってしまった。更にサタンと墮落した人との間に和平が結ばれた。神の側からの介入がなければ、人類は天に逆らって同盟を結び、自らの間で争う代わりに神に向かったの戦闘を続けていたであろう。もともと、墮落した天使と墮落した人類との間に恨みというものはない。両者とも悪であって、背信と邪悪によって、善の存在するところではどこでも、常にそれに対抗して団結するのである。墮落した天使と墮落した人類とは互いに仲間となる。もし天使たちを陥れたように、反乱に加えるために人を惑わすことができれば、彼らは天に向かって反乱を起こす時にも、他の人々と団結するための手先として立ち上がるだろうということを墮落天使の優れた将軍は計算していた。人が神から離れると、サタンに対抗する恨みを持つ力がすぐに失われる。地上における人とサタンとの間の恨みは超自然的に置かれたものである。改心させる神の力が、日毎に人の心の内に持ち込まれなければ、人が宗教的なものに傾く傾向はなくなってしまい、人はイエス・キリストにあつて自由の身となるよりはサタンの虜となることを選ぶことになるだろう。神が恨みを置かれるのである。人は自分でそうすることができない。意志が神の意志に従うようになる時に、人は自分の心と意志を主の側に傾けなければならないのである」（未出版の証より）。大争闘下243、244参照

神がみ言葉によって全ての人の上に置かれた、このサタンへの恨み、悪への憎しみは、これらの悪から救われたいという願いを各々の魂に起こさせる。そして、救いはイエス・キリストのうちにだけ見出されるのである（ローマ7：14～25）。

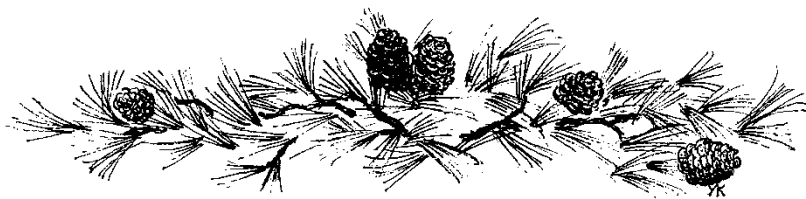
故に全ての魂にサタンへの恨みを植え付ける神の言葉、即ちイエス・キリストのうちにだけ見出される救いを呼び求めて悪を憎む心は、人に与えられた信仰の賜物——これこそ、「神が各自に分け与えられた信仰の量り」であり、世界中の全ての人の口にあり、心にある「信仰の言葉」なのである。

これが、「わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である。すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである」（ローマ10：8～10）。

そういうわけであるから、心の中で「だれがわれわれのために天に上り、信仰をわれわれのところへ持ってきてくれるであろうか」と言ったり、「だれがわれわれのために海の深みへ下って行って……」または「だれがわれわれのために遠くへ行行って、信仰を持って来てくれるであろうか」などと言うに及ばない。なぜなら、「『言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある』。この言葉とはわたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である」からである。（申命記30：11～14、ローマ10：6～8参照）

神が他の全ての人に与えられたように、あなたにも与えられた信仰を言い表し、働かせてみてはいかがだろうか？なぜなら、「信仰をいかに働かせるかを理解すること、これこそが福音の科学」だからである。

R & H Jan. 10, 1899



*今日クリスチャン生活において「努力」という言葉は「行いによる義」の意にとってしまう人がいる。努力と救い、聖化の関係を調べてみよう。努力のいらぬ、安易な天国への道を探している人も多い。

1. どんな教えが一般受けするか？

大争闘下巻 p200 「彼らは、『ただ信じなさい。そうすれば祝福が与えられる』と言う。これを受ける者は何の努力もしないでよいと思っている。それと共に、彼らは、神の律法の権威を拒否し、自分たちは戒めを守る義務から解放されたと主張する。しかし、神の性質と御旨の表現であり、何が神のみこころにかなうかを示している原則に調和せずして、人間は、神のみこころと品性とに一致して清くなることができるであろうか。」

「何の努力も克己も、世俗の愚かさからの分離をも要求しない安易な宗教を望む心が、ただ信じさえすればよいという一般受けのする信仰の教義をつくり上げた。」

2. イエスは何と言われたか？

ルカ 13 : 24 「狭い戸口からはいるように努めなさい。事実、はいろうとしてもはいれない人が多いのだから。」

3. パウロは何と言っているか？

ピリピ 2 : 12 「わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたがいつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いっそう従順でいて、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」

4. 人間の努力は何ができないか？

キリストへの道 p16 「教育、教養、意志の力、人間の努力などいずれも、それぞれ大切な役割を持ってはいますが、心を新たにする能力は全くないのであります。」

キリストの実物教訓 p94 「救いは人間の努力によって得られるものではない。しかし、この世界の一切を投げ打つほどの熱誠さと忍耐をもって求めなければならないものである。」

5. 心を変える力は何か？どこから来るのか？

キリストへの道 p16 「天よりの新しい生命がその人の内部に働かなければ、人は罪より清められることはできません。この力というのはキリストであります。」

6. この力を我々はどうすればいいのか？

キリストへの道 p59, 60 「神と調和し、神に似るにはいったい何をすればいいのでしょうか。……人々が彼の力を信じた時、イエスは病気をおいやしになりました。」

7. 信じるということと意志を働かせることはどのような素晴らしい結果を生じさせるか？

キリストへの道 p61 「イエスが病人をおいやしになったという簡単な聖書の記録から、私どもは罪のゆるしを得るためには、どのようにして彼を信じれば良いかを幾分知ることができます。ベテスダの中風患者のことを考えてみましょう。哀れな病人は、38年も体の自由を失っていたのです。しかしイエスは、『起きて、あなたの床を取り上げ、そして歩きなさい』と仰せたまいました。

この病人は、『主よ、もし私をいやしてくださるならば、み言葉に従います』とも言えたでしょう。しかし彼は、キリストのみ言葉を信じ、自分がいやされたと信じてすぐ立って歩こうとしました (willed 意志を働かせた)。歩こうとした (意志を働かせた) 時に実際に歩くことができたのであります。彼はキリストのみ言葉に頼って行動しましたので、神は彼に力を与え、彼はすっかりいやされたのであります。」

8. そのことをパウロはどのように表現しているか？

ピリピ 2 : 13 「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるどころだからである。」

コロサイ 1 : 29 「わたしはこのために、わたしのうちに力強く働いておられるかたの力により、苦闘しながら努力しているのである。」

9. 信者の内に働く力はどれほどのものか？

エペソ 1 : 19 「また、神の力強い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるかを、あなたがたが知るに至るように、と祈っている。」

同 3 : 16、20 「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、……どうか、わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかたに」

10. 「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」 (マタイ 11 : 30) 「愛を拒み、キリストに引かれることを拒むこともできますが、逆らいさえしなければ自然にイエスに引きよせられる。」 (キリストへの道 p29) 「その戒めはむずかしいものではない。」 (Iヨハネ 5 : 3) 「世に死んだらやさしい。」 (R&H Jan. 6, 1863) と言われているのに、どうしてクリスチャン生活は難しいと思われ、戦いは厳しいのか？

5 T p 231 「彼らは自分の意志を神の意志に屈服させなければならない。内外の障害物との戦いがある。結合する (attachment) と同様に分離する (detachment) という苦しい働きがなければならぬ。高慢、利己主義、うぬぼれ——あらゆる種類の罪——はキリストとの結合に入るためには克服されなければならない。何故、多くの者にとって、クリスチャン生活がみじめで困難に思え、何故、そんなにむらがあり、変わりやすいかという理由は、これらの偶像からまず、自分自身を切り離すことなしにキリストに結びつこうと試みるからである。

R&H Dec. 12, 1882 「へりくだった、自己否定の生活はどうしてそんなに難しいのであろう。それは、自称クリスチャンたちが世に死んでいないからである。我々が罪に死んで後は、それはたやすいものである。」

キリストへの道 p53 「神に己を捧げるには、私どもを神から引き離すものを全て捨てなければなりません。ですから、『あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない』 (ルカ 14 : 33) と救い主は仰せになっているのであります。たとえ、どんなものであっても神から心を引き離すようなものは捨てなければなりません。多くの人は富を偶像にしています。金を愛し、富を欲することは彼らを悪魔につなぐ黄金の鎖であります。ある人々は名声や世的な榮譽を神としています。又、何の責任も負わず、利己的な安楽な生活を偶像にしている人もいます。けれども、こうした奴隷の絆は断ち切らねばなりません。私どもは、なれば神に、なれば世につくことはできません。全く神のものでなければ神の子供ではないの

であります。」

キリストの実物教訓 p95 「ある人々は、常に、天の真珠を求めているように見えるけれども、彼らは、自分たちの悪習慣を全く放棄していない。彼らは、キリストが彼らの中に生きて下さるために自己に死ぬことをしない。彼らが高価な真珠を見出すことができないのはそのためである。彼らは、まだ、汚れた野心や世の快樂を愛する心に勝利していない。彼らはキリストに倣って十字架をとって、克己と犠牲の道を歩かない。九分通りクリスチャンではあるが、完全なクリスチャンになっていない。天国に近いようではあるが、天国にはいることはできない。完全ではなくて、九分通り救われていることは九分通り失われていることではなくて、完全に失われていることである。」

11. 生きて主を迎える者たちは、どのように勝利者となるか？

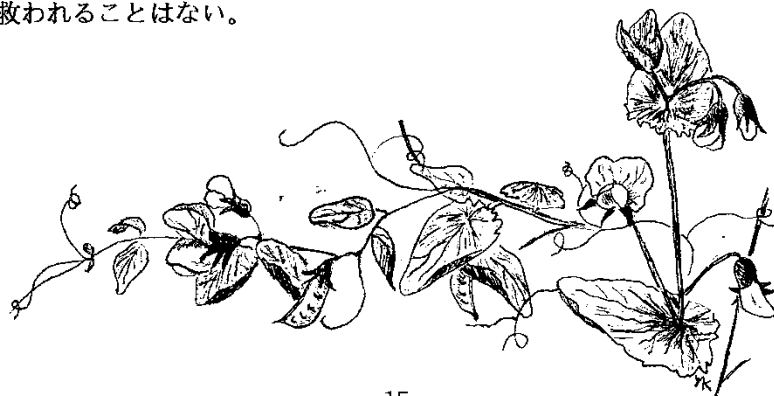
大争闘下巻 p140 「天の聖所におけるキリストのとりなしが止む時地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血を注がれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録 14 章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』（マラキ 3：4）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会』である（エペソ 5：27）。又、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である」（雅歌 6：10）。

12. クリスチャンの努力の動機は何か？何の役にも立たない宗教はどんなものか？

キリストへの道 p53 「神に仕えていると公言しながら自分の努力によって神のおきてに従い、正しい品性を形づくり、救いを得ようとしている人がいます。このような人たちの心は、キリストの愛に強く動かされたものではありません。天国に入るために神が要求したもうものであるからというわけで、クリスチャン生活の義務を遂行しようと努めているに過ぎません。そのような宗教は何の役にも立ちません。」

努力によって救いを獲得できないが、努力なくして救われぬ。行いによって救われるのではないが、行いなくして救われることはない。



瞑 想

上間厚子

「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救いを見たのですから。この救いはあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」。(ルカ 2 : 29 ~ 32)

クリスチャンになってからも私には大きな罪の重荷がありました。どうしても勝利できない罪、このいまわしい罪の性質……罪に陥る度に自己嫌悪と失望にとらわれ、もはやこれまでだとの思いで苦悩する日々……光を見ることができずに、恐ろしい暗黒の中に捨て置かれたような自分を感じることがしばしばでした。

しかし、そのような中で神はこの者をあわれみ、み言葉の光の中に包んで下さいました。神が万民のまえにお備えになったこの救いはまた、私のためでもありました。この救いは単に罪のゆるしだけにとどまらず、罪に対する完全な勝利をも約束するものです。

罪の除去というテーマは特に最終時代の神の民が理解しなければならない重要な、そして深遠なテーマです。それは、神が罪人を完全に救うことができになるという神の力の証でもあります。罪を犯さない完全……あなたは主がそれを成し遂げて下さることを信じるでしょうか？

主はこのように素晴らしい約束を私たちに与えておられますが、実際、自分自身の信仰生活に適用とすることを考えると、依然として罪を犯し続ける自分自身に失望することが常であるかも知れません。ここで、私の個人的な経験を通して受けた祝福を証したいと思います。

私は随分長い間、自分のうちにある品性の欠点に悩んでいました。主はどのようにして、即座にこの罪の性質を一瞬のうちに、またたく間に取り去られないのだろうかと思悩みのうちに圧倒されていました。そのような時に、祈りのうちに提示されたのが次の聖句でした。

「『わたしもまたヨシュアが死んだときに残しておいた国民を、この後、彼らの前から追い払わないであろう。これはイスラエルが、先祖たちの守ったように主の道を守ってそれに歩むかどうかをわたしを試みるためである。』それゆえ主はこれらの国を急いで追い払わずに残しておいて、ヨシュアの手におたされなかったのである。……すべてカナンのもろもろの戦争を知らないイスラエルの人々を試みるために、主が残しておかれた」(士師記 2 : 21 ~ 23、3 : 1)

「あなたがたのうち主を恐れ、そのしもべの声に聞き従い、暗い中を歩いて光を得なくても、なお主の名を頼み、おのれの神にたよる者はだれか。」(イザヤ書 50 : 10)

カナン入国して、ヨシュア生存中に主はカナン征服を成し遂げられませんでした。「イスラエルが先祖たちの守ったように主の道を守って、それに歩むかどうか」を試みるために、主はカナン人を急いでイスラエルにおたされなかったのです。しかも「カナンのもろもろの戦争を知らないイスラエルの人々を試みるために」とあります。このことは何を意味するのでしょうか？

最初、この二つの聖句がどのようにつながるのか解せないでいましたが、祈りのうちに与えられた印象によって、私がとらえた霊的意味は次のようなものです。

カナン征服は私たちの品性の完成の状態です。それは、私たちのうちにある罪が完全に征服され、罪

に完全に勝利した状態です。カナン入国、即ち、私たちが霊に生まれ、キリストにある歩みを始めた時から、私たちの中にある自我との戦い、己の品性の欠点との戦いがあります。主はこの戦いを導き、主の力に頼ることによって、勝利を与えて下さいます。しかし、主は一度にカナン人、ペリシテ人などの敵をおわたしにならないのです。主は即座に、これをなさることがおできになりますが、それをなさいません。即ち、私たちのうちにある罪の性質を一度に一掃しておしまいにならないのです。それは何故でしょうか？

私たちが何の苦労もなく勝利することはみこころではないのです。金は精練されなければなりません。私たちが苦難の炉の中にあっても神に頼ることを学ぶのが神のみこころなのです。

征服されかかっているが、征服されない敵の存在を知ることによって、私たちはもっと、もっと神に頼ることを学ぶようになるのです。私たちが自分のうちにある圧倒的な罪の力を知っても尚、神はそれに勝利させて下さるとのみ約束に信頼し、み言葉の力をわがものとするか否かを主は見ようとしておられます。

そして、過去における罪との戦いの勝利は、現時点における罪の性質の圧倒的な力の存在を知ることによって、己の力では成し得なかったことを知り、それらの勝利はただ神によってのみ与えられたことを悟るのです。己の力では勝利できないのを徹底的に見せられるのです。人が己のために成し得なかったことを人に代わって神がして下さるのを知ります。

主は、試みるために残しておかれた敵の前に、イスラエルの人々の信仰を試しておられます。「あなたがたのうち主を恐れ、そのしもべの声に聞き従い、暗い中を歩いて光を得なくても、なお主の名をたのみ、おのれの神に頼る者はだれか！」とのたもう主に、信仰によって応える者は誰でしょうか！

さて、ここで「カナンのもろもろの戦争を知らないイスラエルの人々を試みるために」主は敵を残しておかれたとあります。罪との戦いを経験しないものは、罪からの救いという神の尊い恵みの価値を知ることにはできません。主はこの戦いを経験させることによって、私たちがいかに高い所から落ちたかを悟らせ、それを回復するための神の犠牲がどれほど大きなものであったかを教えておられます。

そして、主は、この最後の贖いにかかわる真理を最終時代の民が理解するように望まれます。もう時がないからです。最終的預言の成就をさして時は走り始めました。6000年の罪の歴史に終止符が打たれるその時、全てが回復されるその時を、あなたは心から望むでしょうか？その日を早めるために、私たちのなすべき分は何でしょうか？

この約束の成就にあたって、主は急いでおられます。罪の除去にあたって、主は、私たちの協力を求めておられるのです。勝利はすでに約束されており、信仰によって、その約束をとらえる者は、勝利を現実のものとする事ができるのです。

「その日には、罪と汚れとを清める一つの泉がダビデの家とエルサレムの住民とのために開かれる。」

ゼカリヤ書 13 : 1

「あなたがたに関する『神のみこころは、あなたがたが清くなることである』（テサロニケ I 4 : 3）あなたがたもそう願っているだろうか。あなたがたの罪は山のようにになっているかもしれないが、十字架につけられ、よみがえられた救い主のいさおしにすがって、へりくだり、罪を告白するならば、神はあなたがたをゆるし、あらゆる不義から清めて下さる。神は神のおきてに全く一致するよう要求なさっている。このおきては、もったときよきなれ、もったときよくなれと語りかける神のみ声のこだまである。（A A 下 p270）

1. 大争闘上巻 p 372

「大背教のまず第一歩は、教会の権威によって神の権威を補おうとしたことであった。ローマは、神が禁じられなかったことを禁じることから始めて、神が明らかに命じておられることを禁じるに至ったのであった。」

適訳尺：旧訳が正しい。「ローマは神が禁じられなかったことを命じることから始めて、神が明らかに命じておられることを禁じるに至った。」

例えば、キリストの誕生、復活を祝うことを禁じておられない。だから、クリスマス、イースターを教会に持ち込んできた。そして、明らかに命じられていることを禁じるようにした。安息日はその良い例である。聖書に言明されていないことを宗教家たちがやるように命じることをたやすく受け入れる習慣を持つと、人は聖書が明確に禁じていることもするようになる。我々の教会の背教も同じ道をたどらないだろうか！化粧、装身具、ロックミュージック、映画等々……女性接手礼、学校対抗スポーツ等々……。

2. 大争闘下巻 p 353 の5行目

アメリカにおいて、神の民は「神の恩寵（あるいは恩恵）とこの世における繁栄とを妨げている、と宣言される。」

適訳尺：「神の恩寵とこの世における繁栄の回復とを妨げる」

アメリカは日曜休業令の前に様々な災害、道徳退廃と経済的な落ち込みを経験する。神の不興を招いていることを嘆き、神の恩恵と繁栄をもう一度回復するために日曜日遵守を厳しく実施する運動が起こるのであろう。アメリカは今や双子の赤字で借金大国となっている。大恐慌は目前に迫っているとは考えられないだろうか！

3. 大争闘下巻 p 197

「この働きは、キリストを信じる信仰によってのみ達成されるもので、神の霊の内住の力によるのである。」

適訳尺：旧訳が適切。「この働きはキリストを信じる信仰を通し、神の霊の内住能力によってのみ、成就される。」

信仰と悔い改めが切り離せないように（キリストの実物教訓 p 88）、信仰と御霊の働きは切り離せない。

4. キリストへの道 p 79

「私どもの唯一の希望は、キリストの義が私どもに被せられることで、それは、私どものうちに働き、私どもを通して働いてくださる聖霊の働きによるほかはないのであります。」

適訳尺：「私どもの唯一の希望は、私どもに被せられるキリストの義と、私どものうちに、私どもを通して働く聖霊によってもたらされる義にあるのである。」

※信仰による義認と聖霊による清めは切り離せない。キリストは天父に対する信仰によって義とされ（ヘブル5：7）、霊において義とされたのである（Iテモテ3：16）。

最も重要な働き — 親業

A. N. スバルディング著

1913年のある日の午後、カルフォルニアのセント・ヘレンにあるエレムスヘブンの自宅で、ホワイト夫人は、一時的にホワイト夫人の家に住み込んで、出版の働きに携わっていた若者を呼んだ。

「あなたとお話しがしたいのですが」と、彼女は言った。

「教会の中の両親方によってなされなければならない働きの重要性についてですが、あなたは教師であり、又、父親でもあります。父親としてのあなたの働きは、あなたがこれまでにしてきた、そして、これからも成し得る最も大切な教育の働きです。両親の働きは、他の全ての働きの基礎となるものです。

神の民を啓蒙するために牧師、教師、医者、看護婦たちに、彼らができ得る最善のことをさせるべきです。しかし、彼らの全ての努力に勝って両親によってまず最初になされた働きこそ、教会の建設に決定的な影響を及ぼすものです。」

ホワイト夫人は押さえ切れない思いで、続けて言った。

「ああ、私がかつてしていたように各地を回り、人々の前に立ち、神のために彼らの子供たちを訓練することがいかに重要であるかを教えることができたら。」

「しかし、ホワイト夫人」と青年は言った。「あなたはすでに教え、勧告を与えられたではありませんか。両親方はあなたが書かれた本を読むことができます。」

「わかっています。」とホワイト夫人は答えた。「それは確かにそのとおりです。しかし、私が恐れるのは、人々がそれを読まないのではないか、そして、それを理解しないのではないかということです。そして、それが理解され、実行されるのは何にも増して重要なことなのです。」

「つまり、あなたがおっしゃっていることは、子供を訓練するために両親を訓練することが私たちに与えられている最も重要な働きであるということですか。」

「はい、そうです。」と語気を強めて彼女は答えた。

「これこそ、民として私たちの前に掲げられている最も重要な働きです。しかし、我々は、それを指先で触れることさえしていないのです。」

セブンスデー・アドベンチストの起源と歴史第三巻p200～202



リュウキュウコスミレ

国境を超えた「世界化」の波

ソ連・東欧の信者に「福音」の和解

ローマ法王・ソ連議長会談

読賣新聞 THE YOMIURI SHIMBUN

11月27日 月曜日 1984年1月27日

丸山園

朝刊 琉球新報

マルクス・レーニン思想 書記長 批判的論文



1日午前、バチカン宮殿でゴルバチョフ書記長(左)と出迎え握手するローマ法王ヨハネ・パウロ二世(右)。(AFP=共同)

ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、ソ連の指導者であるアンドロポフと握手した。この握手は、冷戦時代の幕引きを告げる象徴的な瞬間と見られる。

ソ連は危機寸前
改革の命運来年決まる

チェコスロバキアも「壁」撤去
オーストリア・ビザの相互廃止も

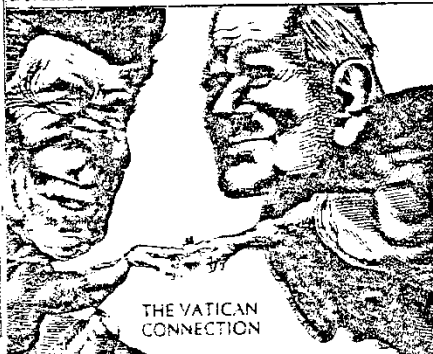
ブルガリア 党指導性放棄を決定
シフコフ氏と息子とを除去

エリツィン
7/14

7/17

現代に適用できぬ
事実上の脱却宣言

Church & State
Q. FEBRUARY 1984 \$1.00



THE VATICAN CONNECTION

歴史的合意が成立
70余年ぶりに外交関係樹立へ

ソ連・法三庁
「バチカンの一日台詞」をめぐり、ソ連・法三庁、共産党書記長兼最高会議議長、共産党第一書記ヨシフ・スターリン、ソ連指導者として初めて訪問したローマ法王ヨハネ・パウロ二世(2時間20分)に、談話のやり取りが、双方は外交関係の樹立を約束した。

AN UNLAWFUL ALLIANCE
「ホワイトハウスとバチカンは完全な外交関係を確立した。かくして、一世紀もひそかに続けてきた求婚を完了した」
Newsweek, Jan 23, 1984

西欧型社主義めざす

スターリン主義的な
伝統と完全に手切る
東独新党首 ソ連TVに言明

「ソ連の指導者たちは、東独の新党首がソ連の指導者として発言したことを歓迎している。これは、東独の指導者たちが、ソ連の指導者たちと手を組んで、西欧型の社会主義をめざすことを示している。」

時 兆

「**世界化の波！**」「**共産諸国の民主化！**」は
我々にとって何を意味するか？

今、何故、共産主義国において民主化なのか？政治的、経済的変化のスピード！突然の冷戦の終結！世界を驚かすゴルバチョフの大胆な改革！ペレストロイカ！しかもすさまじい勢いで進んでいるこの民主化運動！世紀の激変と呼ぶ人もいる。

読売新聞は1989年11月27日付けに「マルクス・レーニン思想、**ゴ書記長、批判的論文—現代に適用できぬ—事実上の脱却宣言！**」と大きく掲載した。ソ連ばかりではない。ポーランド、ハンガリー、チェコスロバキヤ、東ドイツ、そしてルーマニアは流血沙汰に発展し、前大統領チャウセスク夫妻の処刑という手段をとってまでも民主化の道に踏み切ったのだ。

何故？この現象は世界にとって何を意味するのだろうか？神の民にとって何を意味するのだろうか？確かに「世界化」の波が押し寄せているのだ！「世界は一つ」と大合唱を演ずる日が近づいたのだ。近年になって、各国で「国際化」「グローバリズム」「ボーダレス」の歌を練習してきた。日本でも竹下元首相によって盛んに「国際化、国際化」と叫ばれてきた。海部総理はヨーロッパ訪問の際、「新しい世界秩序づくりに積極的に取り組みたい」と発言。

EC統合

ヨーロッパではECの統合を1992年と設定した。「ヨーロッパ共通の家」に東欧も参加しようとしているのだ。「東欧、ソ連をもまきこんだ現代の“ローマ帝国”再現への第一歩という説もささやかれている」。最近のタイムズ誌に、EC委員長ドロールが「1992年の目標に向かって我々はぐずぐずしておられない。急がなければ目標を達成できない。それまでにやらなければ計画は崩れてしまう」とヨーロッパ諸国統合への気負い立ちをアピールしている記事があった。

共産主義とバチカン

大宅壯一氏はバチカン「反共陣営の総本山」と呼んだ。アメリカン・インスティテュート・オブ・マネージメントの会長であるジャクソン・マーチンデル氏は「共産主義が世界を支配するか、それとも、カトリックがそれを阻止するかのどちらかである。ヨーロッパ共同市場を設立したのは誰であるか？金かけて言うが、カトリックである」（ニューヨーク・ポスト Aug. 22, 1962）と言った。カトリック教会自身「最大の反共主義者はカトリックである」（バチカンの秘密p138）と言っている。しかし、何故、相対する二大勢力——イデオロギーが今や融合しているのか？しかも、共産諸国がバチカンに助けを求めているのである。

バチカンの国際政治力

バチカンは「巧言」「和親」政策をもって世界を制覇している。

「第三世界、発展途上国はほとんどカトリック化している。

アメリカは1984年1月10日に完全な外交関係を確立し、一世紀も密かに続けてきた求婚を完了した。」ニューズ・ウィーク Jan. 23, 1984

ソ連は「1989年、12月1日に歴史的合意を成立させた」。

*日本はどうだろうか？それは「アメリカの道連れ」「日米運命共同体」「アメリッポン」「グローバル・パートナー」と呼ばれることによって明らかである。

全世界は一つの頭の下に結集しつつあるのを見て、ダニエル、ヨハネ、E. G. ホワイトの預言に驚くのである。

今度の共産諸国の民主化運動に、バチカンはどうかかわっているか？

1989年ライフ誌11月号にチェコスロバキヤの民主化運動の実現を「ヨハネ・パウロⅡ世の大勝利」という見出しで記事が出た。それは何を意味するか？バチカンの対共産政策を積極的な和平工作に変えた1962年のバチカン公会議の実が熟したことを意味している。

聖書の預言

世界支配を試みた国々を聖書の預言に見ると、バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマであった。世界統一の一時的な成就をバビロン、ペルシャに見た預言者ダニエルは世の終わりの世界支配勢力をローマと言っている。ローマ帝国は476ADに滅亡しているのではないかと言う人があるかも知れない。確かに異教ローマ帝国は滅びたが、それは姿を変えて法王教ローマとなった。法王教ローマはローマ帝国の続きであることを覚えていなければならない。それは中世時代ヨーロッパ諸国を1260年間経済的に、政治的に、宗教的に支配した。1798年致命的な傷を受ける（黙示録13:3）。「終わりの時」になって、「新たなサタンの権力」、即ち「無神論権力」のローマ法王教への挑戦によってである（GC上 344, 345）。しかし、そのローマ法王教の致命的な傷がいやされ（黙示録13:3）、共産化（無神論化）されていた国々を（しかもカトリックと共産主義は共存してきた。その説明は後日にまわすことにする）「つむじ風のごとく」制覇していくことが、ダニエル11章40節～45節に書かれている。それは、我々が、世界歴史の「終わりの時」に住んでいることを意味する。ダニエル11:40～45の預言は象徴的に解釈しなければならない。北の王はローマ法王教を指し、南の王は無神論権力——共産主義を指している。その世界制覇の描写を見てみよう。

「北の王（ローマ法王教＝バチカン）は、戦車と騎兵と、多くの船をもって（様々な戦略）、つむじ風のように彼（共産主義）を攻め、国々に入って、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう。…彼は国々にその手を伸ばし、エジプト（無神論主義＝共産主義）の地も免れません。彼は金銀の財宝とエジプトのすべての宝物を支配し、リビヤ、エチオピア人（やがて良心の自由を押し、龍のように物を言うアメリカ？黙示録13:11——と再び統合して獣を支持するヨーロッパ合州国EC？黙示録7:12～14）は、彼（ローマ法王教）の後に従います。」

「つむじ風」とは旋風、嵐に似た急激な行動と辞書にある。まさしくバチカンの行動を表わしているのではないだろうか？

そよ風からつむじ風へ

「MET」誌1989年夏号に国際ジャーナリスト角間氏は、「今世界をおおう新しい風——ボーダレス（無境界）！この風に背いたら何人も未来へ進めない。政治も経済も社会も……」と書き、1989年1月20日の正午、米大統領ジョージ・ブッシュが「新しい風（ニュー・ブリーズ）が吹いている！」と宣言した言葉を説明している。ブッシュがそよ風と呼んだのは1月に大統領に就任した時であったが、1989年後半には「つむじ風」となって共産諸国に吹き始めた。民主化運動による激変だ。その「旋風」は全世界に及ぶのである。聖書の預言によるとついに「すべての道はローマに通ず」が成就するのである。黙示録記者は旧約の預言者ダニエルの預言と一致して次のように言っている。

「そこで全地の人々は驚き恐れて、その獣に従い」（黙示録13：3）

ローマ法王教の「聖ローマ帝国」の樹立と、そしてその支配を全世界の国々に強制するのに大役を果たすのは誰だろうか？黙示録3：11～18までの預言によるとプロテスタント・アメリカである。

「地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣（ローマ法王教）を拝ませた」13：12
更に17：13に

「彼ら（分裂した諸国）は心をつにしている。そして自分たちの力と権威とを獣（バチカン）に与える」と書いてある。

全ての国民、地の王たち（指導者）、地上の商人たち（財閥）は、赤い獣（政治権力）に乗っている女（宗教権力）に支配されてしまうことが黙示録17、18章に書いてある。フランスのマルローは「21世紀は必ずや宗教的な世紀となるであろう」（文芸春秋1989年11月号の美智子皇后陛下とジャン・ギトン（フランスの哲学者）との対談において引用）と言っている。

ローマ・バチカンは今や何と呼ばれているか？

「最小にして最大の国家」「世界最大の超多国籍宗教団体」「世界最大の教団」「国際政治の最大の仕掛け人」「世界最大の財閥」「世界一流の金融機関、金融総本山」「世界最大の情報国家」と呼ばれている。

バチカンは経済、政治、宗教を通して世界支配戦略を進めている。「地球国家」が彼らの狙いである。国家権力としてはバチカン、ワシントン、モスクワの同盟、宗教的にはカトリシズム、プロテスタンティズム、スピリチュアリズムの結合であり、哲学的には自由、平等、博愛の合体である。世界一つの政府！世界一つの銀行！世界一つの宗教！何と素晴らしいことだと人々は思うだろう。

まとめ

1. 共産国の民主化、東西融合、日米運命共同体、ヨーロッパ共同体、経済のグローバリゼーション（世界化）、世界の宗教統一……は何を意味するか？世界共同体、地球国家の樹立なのだ。では誰が君臨するのか？他でもない、ローマ・バチカンである。
2. では、その事が成就したらどうなるのか？世界は再び、いや、かつてないほどの恐ろしい事態に直面することがダニエル、黙示録の預言に書いてある。かつて目撃したことのない大迫害となる。旧ローマ帝国の初代キリスト者に対する迫害、中世法王教のクリスチャン迫害が繰り返されることになるであろう。良心に堅く立ち、真理に忠実である者たちにその矢が向けられるのである。

3. 教会の震いが近づいている。信心深さを装う者たちは極みまで試される。最後のテスト、日曜休業令は指導者、信徒を問わず、備えができていなければ「三天使の使命を信じると告白する者の大部分の者を」もみがらとして吹き飛ばすのである。それは教会の清めの時でもある。

「教会の清めの日は急速に近づいている。神は、清い真実な民をお持ちになるであろう。まもなく起こる大いなる震いにおいて、イスラエルの力がよくわかるであろう。主がそのうちわをお使いになる時（ご自分の教会を吹き分けられる時）、ご自分の教会を徹底的にお清めになるであろう。」（5 T p80）

4. 教会が清められた後、神は後の雨を降り注ぐことによって、教会の「少数の、忠実な、今は隠されている者」（5 T p81）たちの祈りに答えてくださるのである。

「後の雨」は教会がその不信と背信を認め、悔い改めるまでは決して降らないであろう。ダニエル書9章の祈りが世界総会の働き人の祈りでなければならぬとピアソン元総理は力説されたことがあった。わが教会誌にしばしば見られた「今、後の雨がここかしこに降っている」という諺をなくさない限り、主はみ顔を我々から隠し続けられるであろう。

「われわれは罪を犯し、悪をおこない、よこしまなふるまいをなし、そむいて、あなたの戒めと、おきてを離れました。われわれはまた、あなたのしもべなる預言者たちが、あなたの名をもって、われわれの王たち、君たち、先祖たち、および国のすべての民に告げた言葉に聞き従いませんでした。主よ、正義はあなたのものですが、恥はわれわれに加えられて、今日のような有様です。……主よ、恥はわれわれのもの、われわれの王たち、君たちおよび先祖たちのものです。……主よ、あなたご自身のために、あの荒れたあなたの聖所に、あなたのみ顔を輝かせて下さい。……われわれがあなたの前に祈りをささげるのは、われわれの義によるのではなく、ただあなたの大いなるあわれみによるのです。主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください。わが神よ、あなたご自身のために、これを延ばさないでください。」ダニエル書9：5、6～8、17～19）

「わたしは主を待ち望みます。わが魂は待ち望みます。

そのみ言葉によって、わたしは望みをいただきます。

わが魂は夜回りが暁を待つにまさって主を待ち望みます。」

詩篇130：5、6



×××××××××× 経済大恐慌は来るか! ××××××××××

ラビ・バトラーの「1990年の大恐慌」が全米でベストセラーになっている。わが国では佐藤隆三博士の翻訳で出版されている。

富の集中化、投機熱の上昇、ドルの暴落、貨幣の増加率、インフレーション、企業に対する政府による規制の周期等から、近いうち、世界経済大恐慌が来ると説得力のある予測をしている。

赤間剛氏は、「世界の金融、資本市場で今、二つの不気味な時限爆弾が“カチカチ”と時を刻んでいる。一つはアメリカの膨大な赤字、もう一つは発展途上国の借金である。」と述べ、「世界恐慌が来るかどうかはこの二つの時限爆弾のスイッチをどこでどう切るかにかかっている。」と言う。

宮沢元大蔵大臣は、「日本経済は、これから良くなるところで、アメリカの失業率も史上最低で世界的に信用保証機構が整備されており、29年の大恐慌のようなことは起こりえない。」と述べた。それは多くの経済評論家の声を代表している。出回っている出版物を見ると、1990年代黄金時代に突入したと言っている。いくつかの重要な憂慮すべき要因を指摘しながら、あえて悲観的な考えをおさえて、楽観主義におぼれている。

宇野正美氏も様々なデータを提供して経済崩壊が切迫していることを叫んでいる。しかも、世界統一陰謀と関わっているという観点から説いている。繁栄と楽観ムードが1930年代の大恐慌の時もみなぎっていた。

聖書と証の書はどのような見方をしているか。日曜休業令とどう関わるか。もし、近いうちに起こるとすれば、神の民はどのように備えたらよいのか?

○ カセットテープ プrint付 金城重博 1,500円



後の雨が今降っている？

後の雨は＝主の御前からの慰め（使徒行伝3：20）＝第三天使の大いなる叫びである。

初代文集 440、451 大争闘 381～

「第三天使の使命が大いなる叫びとなって膨れ上がる時、又、大いなる力と栄光が最後の働きに伴う時、神の忠実な民は、その栄光にあずかるであろう。悩みの時を通過させるために、彼らを生き返らせ（Revive）、力づけるのは後の雨である。彼らの顔は第三天使に伴う光の栄光で輝くであろう。」

7BC 984

第三天使の使命は獣と獣の像を造ることに対して警告する。黙示録13章に記されているこの危機に対決するために、神は黙示録18章の大いなる天使を送られ、第三天使に力と勢いとを与えられる。

初代文集448頁によると、この天使は「ちょうどその時」に来る。神は最後の諸事件の日時を与えておられないが、神の民はこの事件について無知であってはならない（Iテサロニケ5：1～5 大争闘下巻 359）。

天の聖所においては生けるものの審き！地においては黙示録18章の大いなる御使の働き！いつ、このことが起きるのだろうか？

この点に関してあまりにも不明確なことが多い。第三天使の使命がどのように始まったかについては皆一致している。しかし、その使命がどのように終わるのかということについては多くの混乱がある。わが教団の出版物に「今、後の雨が降っている」という記事が何回か掲載された。

ジョージ・ライス（アドベンチスト・ライフ 1989.10.25）

「私は各地で後の雨の準備についてセミナーを行なっています。自分たちも聖霊の降下を受けたいと熱望し、祈り求めた結果、北アフリカで実際にどういうことが起こっているかについてお話ししましょう。（いくつかのハプニングを述べて）……これらのカンファレンスの総理たちや牧師たちは皆、聖霊の降下を求めて祈りに努めているのです。私はすでにこの地域の人々に後の雨が注がれていると確信します。」

W. R. ビーチ（R&H 1965.1.28）

「そして今日、主はご計画に従ってその力を増しておられます。主は『後の雨』の経験を与えておられると私たちは信じます。御約束によると、主は御霊を『すべての肉なる者に注がれ』ます。（ヨエル書2：28）これに誤りは有り得ません。私たちはそれに気がつかないかも知れません。経験しないかも知れません。しかし、今、何千という人々がこれを経験しているのです。」

A. L. ページ（Central Union Reaper 1968.9.17）

「私たちが祈り求めてきたこと、又、最近ニューヨークのキャンプ・パークシャーで行なわれたような、指導者や伝道者の集会において経験されている後の雨が、6月30日から7月3日の間にワウニタ・ホットスプリングで一般、又は学生文伝指導者の上に顕著な方法で注がれました。」

R. G. キャンベル (Letter to subscribers of R&H 1968)

「後の雨が降っています。私たちのまわりの至る所で、聖霊が豊かに注がれています。……それについてはレビュー・アンド・ヘラルドをお読み下さい。」

W. J. ハケット (President of the North Pacific Union Conference, Letter to the field, 1968)

「世界中で後の雨の初期の降り注ぎの証拠が見られます。」

H. W. ロー (Defense Literature Committee Letter, 1968. 5. 20)

「教会の教えでは、後の雨のもとで大いなる叫びが起こり、それから日曜休業令、迫害、死の法令、そして全体の恩恵期間の終わり……が来ることになっています。」

B. R. スペーア (いつ神の民は印されるのか? Published by the Defence Literature Committee of ten Conference 1963)

「神の靈感による順序—— 1. ふるい 2. 後の雨 3. 大いなる叫び 4. 最後のテスト 5. 第三天使の終わり 6. 恩恵期間の終わり 7. 罪の除去 8. 神の印を受ける 9. 大祭司としてのキリストの働きが終わる 10. 最後の七つの災い (5～9まではまとまって重複して起こる。これらの順序を正確に定めることはできない。)」

にもかかわらず、他のアドベンチストによって書かれた記事には、ちょうど同じくらいはっきりと、後の雨が韓国に降っているということ、ある牧師たちは聞かされた。しかし、その後、韓国においてより多くの分派や教会離れする信者が起こっているという報告がなされている。

レビュー・アンド・ヘラルドでは、「後の雨が降っています」と書かれている特別号の購読勧誘を行っていた。それから購読者は後の雨は降っておらず、教会は今もそれを求めなければならないとの世界総会総理の言葉を読む。後の雨 (黙示録 18 : 1) はアメリカ合衆国において、日曜休業令が施行される (黙示録 13 : 14～17) 以前に来ると教会の尊敬されている指導者たちによって言われている記事や言述がしばしば見受けられる。その一方では、同じように著名な神学者や、聖書学者たちによって作成された数々の図表は、後の雨が黙示録 13 : 14～17 の日曜休業令の危機の後に来ることが示されている。

信者はチンプンカンプンになって迷ってしまう。リバイバルだ、後の雨だと幾度かのプロパガンダに、あるいはハッパをかける声に聞きあきた信者は少なくない。確かに教会員の数は増えているには違いない。しかし、神は言われる。

5 T 31～32

「人気 (俗受け) と人数の獲得の増加のために標準を低めるならば、そして、この人数の増加を喜びの理由にするならば、あなたがたの盲目がはなはだしいことを表わしている。もし人数が成功の証拠であるなら、サタンが一番である。何故なら、この世において彼に従う者が大多数だから。……教会員数ではなく、我々の教会を構成している人々の徳と、知性と、信心が喜びの源泉であるべきである。」

クリスチャンの奉仕 49

「民としての我々の状態を考える時、私は悲しみに満たされる。主が天を我々に対して閉ざされたのではなくて、絶えず背信する我々自身の行動が我々を神から隔てたのである。高慢、貪欲、世俗への愛着が心の中に住みついて、天国からの追放や罪の宣言を恐れない。悲しむべき僭越な罪が我々の間に住みついている。それにもかかわらず教会は盛んである。教会の内部は平安と霊的な繁栄があるというのが一般の見解である。教会は指導者なるキリストに従うことからまわれ右して、エジプトへ向かって着々と退却している。それなのに彼らの霊的な力の欠乏に驚く人は少ない。神の御霊の証に対する疑いとはなはだしきは不信に至るところわが教会内に芽生えつつある。サタンは教会をこのような状態にしておきたいのである。」

青年たちの教会離れが嘆かわれる。北米のSDA青年の教会離れは何と70%だと言われている。

シラケ！と思いつながら、尚モダニズム、リベラリズムの波に溺れ、助けを求めている青年たちも少なくないと思う。青年向けのインサイトというSDAの教会誌がある。その中に、こんなことが書いてあるよと息子が教えてくれた。「再臨運動の初期の青年たちは、我々の世代に主は来られると信じていた。今から30年前の青年たちはキリストの再臨が我々の世代にあることは不可能(Impossible!)と思うようになった。しかし、今はキリストの再臨があろうとなかろうとそれがどうした(So what!)という考えを持つようになった」と。それは後の雨についても言えることではないだろうか？

ああ、何と悲しいことであろうか。……そんなことを書くと、消極的だ、今は「主にある喜び」の時だと言われるだろう。後の雨を受ける前の神の民の姿を聖書と証の書から学ぶ必要がある。彼らは自分の罪、教会の不信と背教、キリストの今の苦しみ、世の悲惨のために嘆き、泣き、悲しむのである。それは利己的なものではない。人をつまづかせる陰鬱さではない。それは義認の喜びと讚美を消してしまうようなものではない。イスラエル捕囚前のエレミヤの嘆きである。神の民の虐殺命令が出た時にエステルが王の前に出た時の神の民の嘆きである。それは民が恥と笑い草になっていることのゆえに憐れみを乞うダニエルの祈りである。イエスのエルサレムに対する悲しみである。そして、主のみこころを痛み、主を何度も悲しませたことに対する弟子たちの悲しみである。それは山上の垂訓の悲しみである。それはパウロの言う滅びに至らせる悲しみではなく、悔い改めに至らせる悲しみである。それは人口雨を降らせる表面上の議案で譴われる「悔い改め」ではない。それは、「罪と汚れとを清める一つの泉」(ゼカリヤ書13:1)を開く、天から注がれる嘆き、悲しみである(同12:10)。「三日目にわたしたちを立たせられる」(ホセア書5:15~6:3)春の雨のための悲しみである。それは「神の民が永遠にはずかしめられることがない」(ヨエル書2:15~29)のために、「諸国民の中で汚したわが聖なる名」(エゼキエル書36:15~23)のために、後の雨のために泣くのである。それは「主が高くしてくださる」ために「苦しめ、悲しめ、泣け、笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えよ」(ヤコブ書4:8~10)と言われていることなのである。

後の雨は今、降っている！は混乱させる。1. 生ける者の審きの到来に言及していない。2. 審きにおいてなされる素晴らしい、特別な祝福、経験という約束が言及されていない。それは罪の除去であり、後の雨である。「最後の贖いである」。3. 後の雨による品性の完成である。4. 後の雨は教会が徹底的に震われてから来るのである。5. 日曜休業令の最後のテストの後に来るのである。

後の雨は何のために降るのか？いつ、どのような条件を果たしたら降るのか？何を悔い改め、何を告白するのか？ラオデキヤの悔い改めは何なのか？後の雨の約束を明確に理解しないならば、ユダヤ人の「嘆きの壁」に終わるだけでなく、「別の霊」が降り注がれる危険がある。

「わたしは、御座の前でまだ頭をたれている人々を見ようと思って振り返った。彼らはイエスがそこを去られたことを知らなかった。サタンは御座のそばで、神の働きを行おうとするかのように見えた。わたしは、彼らが、御座を見上げて、『父よ、あなたの霊をお与え下さい』と祈るのを見た。するとサタンは、彼らに汚れた力を吹き込むのであった。」

患難から栄光へ46

「もし約束の実現が見られないとすれば、それは約束が理解されていないからである。」

大争闘下巻144、145

「しかし、彼らは、主の働きをよく理解し、彼が神の前に出られるのに信仰によって従っていかねばならない。この意味において、彼らは、婚姻の部屋に入ったと言われているのである。……これらの人々は、天の聖所に関する真理と、救い主の務めの変化とを認め、信仰によって、天の聖所における彼の働きに従っていった。」

キリストの至聖所における働きを理解させないことがサタンのねらいである。それに万事がかかっていることを彼は知っている（大争闘下巻 221）。それを最も憎んでいるので、懸命の努力をするのである。そこから信仰による義認の完全にして十分な体験が与えられ、彼の力が打ち砕かれるのを彼は知っている。

「聖所と調査審判の問題は、神の民によってはつきりと理解されねばならない。全ての者は、自分たちの大いなる大祭司キリストの立場と働きについて、自分で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあつて必要な信仰を働かせることも、神が彼らのために計画しておられる立場を占めることもできなくなる（不可能）。」（大争闘下巻222）

1. 後の雨の約束は信仰を働かせる時に注がれるのである。
2. 現在のイエスの大祭司の働きを理解しないと信仰を働かせることはできない。
3. 結果は後の雨は降下しない。
4. SDAの立場を失ってしまうことになる。

「神の言葉の中には尊い真理が多く含まれている。しかし、群れが今一番必要としているのは、『現代の真理』である。」（初代文集 137）

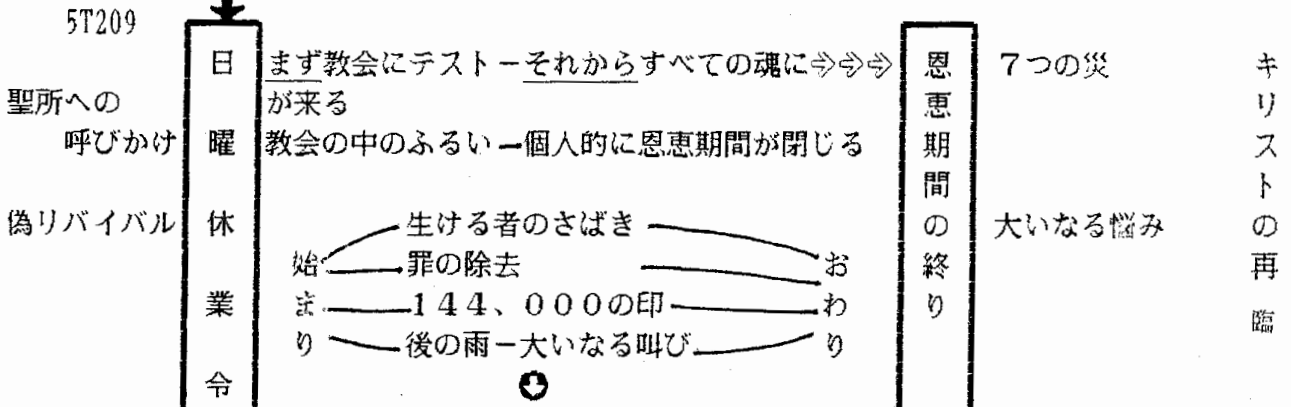
日曜休業令の前後の教会の経験

獣の像は恩恵期間が閉じられる前に形づくられると言うことを主は明らかに私に示された。なぜならそれは神の民にとって大いなるテストとなるもので、それによって彼等の永遠の運命が決定されるのである。これは神の民が印される前に経験せねばならないテストである。7BC976

教会の危機と沈下が最高の時

最後のテスト

5T209



多くの者加わる

ふるいまで二つのグループが発展する：

1. 少数の忠実な、今は隠されている者らは忌まわしき事に対して嘆き悲しむ
2. 大部分の者らは「平和だ、無事だ、教会は盛ん、平安、霊的な繁栄」を叫ぶ

広 告

聖所からの光 (図解)	750円
図解説明	500円
テープ	1000円
仰いで生きよ	100円
ダニエル書と黙示録	350円
開かれた門	480円
三天使、1888年、そして今日 (D. K. ショート)	250円
キリストの再臨に備える	60円
少数と多数 (預言の霊)	60円
日曜休業令前後の教会の経験	90円
サタンのわな TM472~475	210円
何故ユダヤ人はメシヤを拒んだのか?	150円
生ける神の印 5T207~216	240円
ラオデキヤ教会 3T266	60円
ヨシュアと天使 5T472~476	150円
証の軽視 5T75~83	120円
ふるい EW437~441, 1T179~181	60円
私もまた彼らのために悩み (欺瞞) を選ぶ	120円
最後の時代に神が用いられる器	60円
聖霊がしきりに我々に教えようとしている大教訓	90円
分離はいつ、どのように起きるのか?	60円
キリストの品性	300円
イエスの品性の美しさを仰ぎ見る	120円
義人は信仰によって生きる	30円
田舎に出よ (質問に答えて)	150円
肉食に関する科学者たちの発言	30円
ある科学者の証言 (積極的・消極的考え方の影響)	30円
144,000人の印はいつ?	60円
6000年の地上歴史 (預言の霊)	60円
いま! (植田正志訳)	390円
レビ記に見る三天使の使命 (テープ)	1000円
バチカンの世界支配陰謀 I・II (テープ)	1500円

